

特集 「2015年度人工知能学会全国大会 (第29回)」

インタラクティブセッション

内海 慶 (株式会社デンソーアイティラボラトリー), 原田 拓 (東京理科大学),
佐藤 敏紀 (LINE 株式会社), 松田 憲幸 (和歌山大学)

1. はじめに

インタラクティブセッションには、他のセッションとは異なり、発表者と参加者がゆっくりと時間をかけて議論し合うことができるという特徴がある。ポスターによる発表だけではなく、デモを行うことで、より議論を深めることが可能である。発表者は口頭発表とインタラクティブセッションの両方で発表できる。そのため、口頭発表とインタラクティブセッションでは発表の仕方を変えて、研究内容をよりわかりやすく伝えるということもできる。また、インタラクティブセッションの開催時間帯にはすべての大会参加者が参加できるよう、他のセッションが併設されないスケジュールが組まれている。多くの人に研究を知ってもらうためにも、インタラクティブセッションでの発表は有用であろう。

インタラクティブセッション発表部門では、発表のわかりやすさ・インパクト、今後の発展性といった口頭発表とは異なる視点において特に優れた発表を、口頭発表部門とは別にインタラクティブ発表部門での大会優秀賞として表彰している。大会優秀賞の選定は、参加者による投票によって行われる。

2. 今年度の様子

今年度は、大会3日目の6月1日9～11時に開催した。発表は84件(去年は80件)あり、そのうち口頭発表と両方での発表は72件であった。ポスターによる発表だけではなく、パソコンやタブレット、その他の機器を用いたデモなどが活発に行われていた。

セッション開始時刻は、昨年度と同様に朝9時であったが、9時前には多くの参加者が会場にいられており、9時前にすでに説明を開始されている発表も見られた。セッション終了時刻である11時の時点でも、非常に活

発に発表・議論が行われており、大盛況であった。

例年、デモを用いた発表が注目を集めているが、今年度の「漸進比較法によるランキング推定」では参加者に北海道銘菓を振る舞い、評価結果からセッション中にランキングを決定するというデモで提案法の有用性と実問題への適用例を効果的に示していた。また、「遠隔地間における紙文書授受感覚の再現」では大掛かりなデモ機を用いて、文章や口頭では伝えにくい人の感覚について参加者に説明をしていた。デモによって参加者の理解もより深まっただろう。

発表会場には3階のモールを使用した。会場はフロア全体が見渡せる構造であり、セッション参加者がスムーズに移動可能な広さであった。参加者は移動や人の密集による熱気を気にせず、聴講に集中することができただろうと思われる。

今年度のインタラクティブ発表部門の大会優秀賞の選定では、投票の仕方を工夫した。具体的には、優秀賞にふさわしいと思われる発表について、順位は付けずに投票していただいた。さらに、講演ID、タイトル、筆頭発表者、所属機関をあらかじめ投票用紙に記入しておき、単に○印を付けるだけで投票できるようにした。加えて、セッション終了後もセッション当日の間は大会受付付近に投票箱を置いて投票できるようにすることで、例年と比べて投票数を多くすることができた。しかし、来場いただいた参加者数を考慮すると投票率はまだまだ低い。また、今年度からは参加者の方々には、同じ所属の発表には投票しないこともお願いしているが、周知は十分とはいえない。賞をもらうことは発表者にとって大きな励みとなるため、一般参加者の方々には普段交流のない分野の発表も聴講いただき、積極的な投票をお願いしたい。

3. おわりに

発表者の多くは口頭発表も行っており、デモを併用したプレゼンテーションや、参加者と時間を掛けて深く議論するための場としてうまく活用されているようである。

昨年度に引き続き、今年度も非常に多くの皆様にご発表・ご参加いただいた。セッション担当一同、心よりお礼申し上げます。セッション名称のとおり、発表者と参加者がインタラクティブに議論している様子を見て、改めて本セッションの意義を確認することができた。来年度の大会でも、多くの皆様のご発表・ご参加を期待したい。

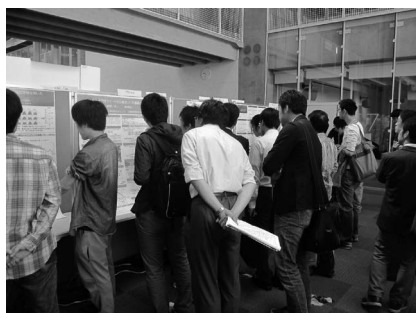


図1 インタラクティブセッションの風景